広報
ふじかわ

11月号　昭和61年11月5日発行　No.304

町のメモ

昭和61年11月1日現在

人口	16,903人
増減	＋25人
男	8,337人
女	8,566人
世帯数	4,416世帯
面積	31.09㎢

富士川町　総務課

町のことしの目標
「健康な心とからだで住みよい町に」

おもな内容

2～3ページ	来年3月完成を目ざし防災行政無線工事がスタート、上谷にスポーツ広場完成
4～5	盛り上がった記念町民体育大会
6～7	社会教育あれこれ、町の昔ばなし伝説「川坂の観音さま」
8	戸籍の窓、お母さんの知恵袋、文協俳句会

10月19日、町中央公民館が実施している「少年少女ふるさと教室」の学級生約60人が、富士川河川敷で手作り縄文土器の野焼き作業を体験しました。

当日、まきやわらをつかい約5時間で野焼きされた土器は、子どもたちに縄文時代の文化などを知ってもらうことなどを目的に、町文化財保護審議会委員の稲垣甲子男先生・宮沢功先生の指導のもとにつくられたもので、大変見事にでき上がっていました。

この土器は、町文化祭で展示され大好評でした。

5,790万円の事業費で 来年3月完成を目指し 防災行政無線工事スタート

役場の行政事務や各種団体などの事業を、みなさんに広くお知らせしてきました広報無線が、来年三月完成を目ざし、非常用電源や時差放送装置などを備えた防災行政無線として新しく生まれかわります。

この事業がスタートしましたので、今月は、この事業のあらましをみなさんにご紹介します。

工事の概要

この工事は、いつ起こるかわからない大地震や、その他の災害時の情報伝達網を充実することを目的として行われます。

工事費は五千七百九十万円で、固定局・中継局・子局の整備が主な内容です。

◎固定局（役場放送室）の整備

役場放送室には、新しく非常用電源・操作卓・地図表示盤などが設置されます。

操作卓内には、選択呼出装置や時差放送装置などが組み込まれ、この装置によって、従来、全町と松野・富士川両地区の三方法に別けられていた放送も、さらに小地区単位で放送できるようになり、また、受信所間が近いため、放送が重複して聴き取りにくい地域も解消されます。

この操作卓の操作によって、電波が中継所に向かって発射されます。

◎中継局（金丸山中継所）

中継局は、新たに野田山健康緑地公園内の金丸山頂上に設置されます。

局内には、固定局から受けた電波を子局（受信所）に向け発射する無線装置や非常用電源などが設置されます。

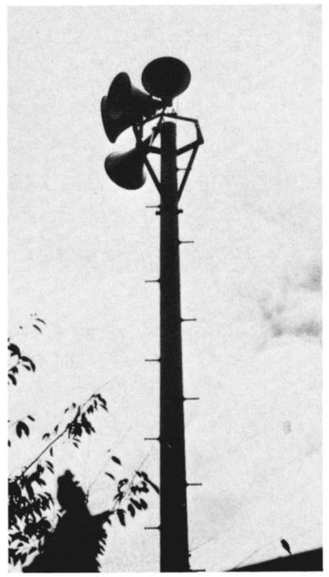
◎子局（屋外受信所）

子局は、中継局からの電波を受け「こちらは広報ふじかわです……」の呼出によって、災害に関する内容や行政事務などをみなさんにお知らせする施設です。

現在、町内には四十二か所の子局がありますが、無設置地域や難聴地域解消のため新たに五局（中野台団地内二局、八幡町内一局、清水町内一局、新町内一局）増設します。この結果、子局は工事が完了すると四十七か所となります。

また、新しく戸別受信機四十個を、町内の官公署、幼、小・中学校、山間地の住宅、事業所などに設置します。

子局にも非常用電源が設置されます。



子局のパンザマスト

特色ある装置など

◎非常用電源の設置

現在の設備では、停電時使用不可能となりますが、新設備では、すべての施設に非常用電源が備えつけられていますので、災害発生に伴う停電時にも、一週間から二週間程度は自動的に非常用電源に切り換わり、放送できるようになります。戸別受信機は約三日間ぐらいは受信できます。

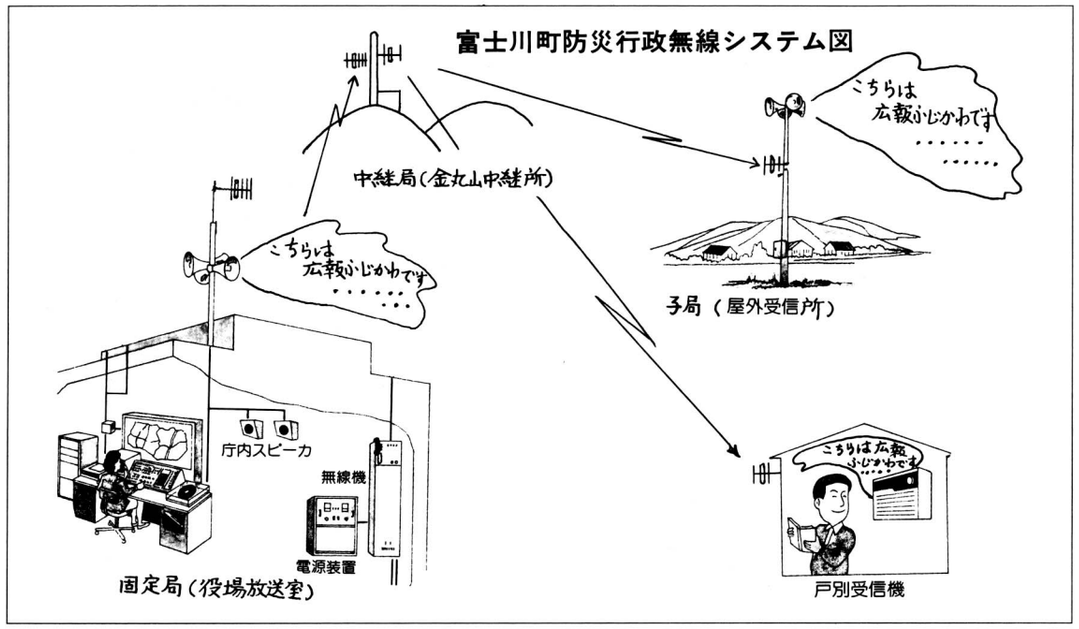
◎時差放送装置の導入

放送が重複し、聴き取りにくい地域解消のために導入された装置です。

この装置によって、四十七の受信所は大きくAグループとBグループの二つに別けられ、Aグループ放送終了後Bグループが放送する仕組みとなっています。

受信所が重複している地域では、一回で聴き取りにくかった内容が再度確認できるなどの利点があります。

新装置が取り付けられる役場放送室



◎中継局の設置

当町は山間地が多いため、固定局から子局に直接電波を発射すると受信できない地域があります。

ますので、各子局が安定して電波を受信できるよう中継局を設けました。

来年の3月完成

11月中旬から子局設備の改修に入り、その後、機器設置や調整試験が行われます。3月中旬すぎにはすべての工事や検査が完了し、新装置によってみなさんに各種の情報をお知らせすることになります。

可聴範囲は二百～三百メートル

可聴範囲（聴き取り可能な地域）は、地形・風向き・交通騒音などの条件によって多少異なりますが、受信所を中心として平坦地で二百～三百メートルをみています。

工事にご協力を

工事期間中、機器取付や調整試験のため試験電波発射などで、みなさんに大変ご迷惑をおかけすると思いますが、町の情報伝達網整備をご理解の上、ご協力をお願いします。

北松野「上谷（かみや）」にスポーツ広場が完成

北松野の「上谷」に、昭和59年12月から建設を進めてきたスポーツ広場が完成し、10月12日、常葉雅文町長や俣下区民など約百人が出席して、その落成式や俣下クラブ（中川久一会長・会員六十五人）結成十五周年を記念する運動会が盛大に行われました。

このスポーツ広場は、みかん畑、田、山林などを整地して作った約一千八百平方メートルの広場で、地域のみなさんがソフトボール練習や軽スポーツ広場などとして利用できます。

当日行われた運動会では、子どもたちのボールけりやインディアカゲームなど元気一杯に五種目が行われました。その後、不用品バザーやカラオケ大会なども行われ、待望のスポーツ広場完成をお祝いしました。

初めて利用した中川会長は「近くに軽スポーツ広場ができたことは、区民のコミュニティづくりや体力づくりに大いに役立つと思いますので、今後有意義に利用していきたい」と話していました。

テープカットする常葉町長

元気にプレーする子どもたち

聖火リレー・花火大会・プラザ富士川などで

盛り上がった記念町民体育大会

秋晴れの10月5日、町をあげてのスポーツの祭典「第三十回記念町民体育大会」が、町立第一中学校グランドで、全町から十七チームが参加し、盛大に行われました。

午前8時、各区選手団の入場行進に始まり、大石達也さん（富士見町）が聖火台に点火した後、南町一・二区チームの錦織大介くんが参加選手を代表し力強く選手宣誓しました。

引き続き、七種目の得点種目や四種目の対抗レクリエーション種目などに入り、応援にかけつけた約一万人の町民から盛んに声援を受け熱戦をくりひろげました。また、各種団体や事業所など三十六団体約一千人が「プラザ富士川」に出場し大会に花を添えました。

熱戦をくりひろげた結果、東町・日の出町チームが総合優勝に輝き、準優勝が八幡・富士見町、三位が北松野二区でした。

大会前夜、聖火ランナーが町内を一巡し、また、町商工会（望月貞彦会長・会員三百八十七事業所）が、町制八十五周年、町村合併三十周年、同大会をお祝いする花火大会を富士川河原で開き、大スターマイン一基、スターマイン三基などを次々と打ち上げ、記念大会を盛り上げました。

トーチに点火する久保田会長

大石達也さん（富士見町）が聖火台に点火

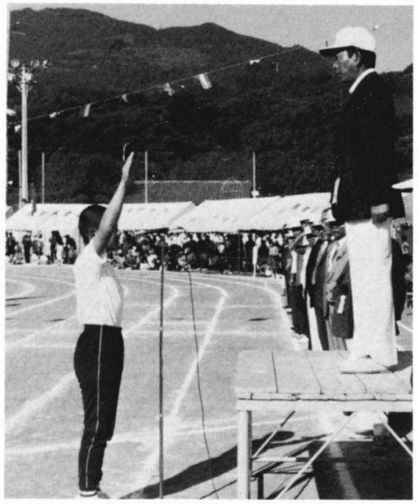
見事な演奏を披露する二小トランペット鼓隊

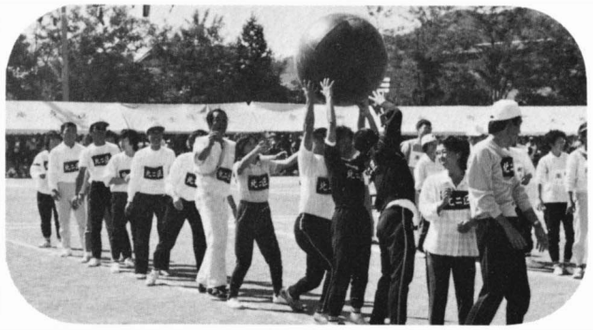
親子で仲良く家族リレーを

大会を盛り上げ
秋の夜空を美しく飾った花火大会

三輪車競争で大会を盛り上げた子どもたち

町内一周聖火ランナー公民館に到着


力強く錦織大介くん（南町一・二区チーム）が選手宣誓


新種目のジャンボボール送りに挑戦する選手

力のバランスが大切な富士川渡し

力走する選手

力が入ったつなひき

—親子で挑戦！—

野外生活の知恵 サバイバル入門

野性動物に出会ったら

野外活動をするということは、野性動物のすみかに足を踏み入れるということでもあります。動物は金属音が嫌いなので、クマやイノシシに出くわしたくない人は、リュックに鈴や鐘をつけて歩きましょう。

小動物に出会ったら

リス、ヤマネ、タヌキなどの小動物に出会うのは楽しい。いいチャンスだから、驚かさないように観察しよう。

クマやイノシシに出会ったら

北海道のヒグマは別として、動物のほうから襲ってくることはまずない。しかし、出合い頭にバッタリ出くわしたり、子連れの動物のときは注意しよう。あわてて逃げると本能的に向かってくることがある。そんなときは、けものの目をにらんで、ジリジリ後に下がっていこう。相手が目をそらしたら勝ちだ。

野犬に出会ったら

クマやイノシシと同じで、相手の目を見てジリジリと下がろう。

▼人の道　▼けもの道

けもの道の見分け方

野性動物が、水場に通ったり尾根を越えたりしているうちに、自然と道らしくなってしまったのが「けもの道」。そんな道に迷い込んでしまうと困ってしまう。

上の図のように、人の道は人間が立って歩ける空間があいている。しかし、けもの道は、見通してみると人間の腰の下くらいまで草や枝が茂っている。

▼社会教育あれこれ▼

野焼き

少年少女ふるさと教室で、縄文土器づくりに挑戦した。子ども達にこの富士川の町を理解してもらい、遠い先人の苦労や知恵のほんの一部でもわかってほしいという願いをこめての教室である。

縄文土器の名称は土器の表面に縄目の文様が施文されているところからつけられたものだが、地域や時代によっては貝や竹等を使って施文したものも少なくない。これらを総称して縄文土器と呼んでいるのである。

講師には、考古学の立場から稲垣甲子男、陶芸の立場から宮沢功両文化財保護審議委員にお願いし、形成から焼成までご指導をいただいた。

まさに挑戦で、松野の遺跡から採取した粘土に若干の信楽粘土を混ぜ、ねりから、粘土紐で輪積みの方法で形成していくのであるが、見た目ほど簡単ではなく、悪戦苦闘の何時間かであった。

この土器づくりの目玉は、焼成に野焼きの方法をとることである。縄文期には窯はなく、露天で器を焚木で焼き上げたといわれ、今でも地球上にはこの方法で土器を作る民族があるが窯で焼くのと違って、かえってむずかしさがあるのだ。

この土器づくりの感激は何といっても、土器にかぶせたワラが燃え終り、いよいよ灰を取り除く時である。割れなかったか、色はどうかなど心配はつきないのだ。およそ八〇〇度前後で焼き上げた土器は、粘土中の鉄分が酸化して、全体に特徴的な赤味を帯びているが、焼成中、平均的な温度で焼けないため、部分的に灰色や黒色が混ざり、大変素朴な味わいがある。

文化の伝承とか文化財の保護意識の昂揚などとかたいことをいわなくても、このふるさと教室、いろいろな体験をしてもらっているのだが、今回の土器づくりに参加してくれた子どもたちやお父さん、お母さんたちはとても楽しそうであった。

家族で話し合おう 図解交通安全

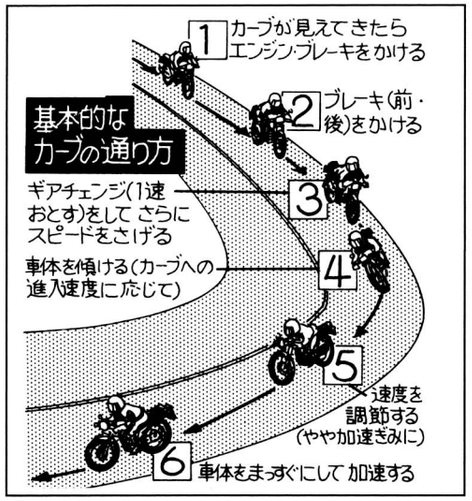
バイク編 カーブを安全に走る

遠心力はスピードで制御

ブレーキをかけず、スピードも落とさずにカーブを曲がろうとするとどうなるでしょう。バイクは自然に外側へ外側へと飛び出してしまいます。これは外側へ出ようとする遠心力がバイクに働くためです。

遠心力は次の条件でどんどん大きくなります。①スピードを出せば出すほど　②カーブが急になればなるほど　③車の重量が重ければ重いほど

カーブを安全に通り抜けるには、遠心力をうまく制御しなければなりません。前記の条件でライダー自身がコントロールできるのはスピードだけです。遠心力に負けないために、カーブの手前では十分にスピードを落とし、遠心力の影響を弱めて安全にカーブを曲がってください。また、カーブでの急ブレーキ、急ハンドルはスリップを招きますので気をつけましょう。



10月の交通事故

人身事故—8件(5)
物損事故—3件(8)　合計11件(13)

富士川身延線—2件(5)
国道一号線—3件(4)
道—5件(0)
町道—1件(3)
県道—1件(1)
その他—0件(1)

(　)は昨年

町の昔ばなし伝説（十五）

川坂の観音さま

川坂の観音さま

昔、中之郷の川坂は、火事の絶えない村で、火事といえば川坂だと、いわれるくらいでした。

ある風の強い晩のことです。また火事が起りました。猛火に包まれた家のなかには、取り残された子どもがおりました。家の人たちはなす術もなくただ一心に観音さまにお祈りしました。

するとどこともなく法衣を着られた観音さまが現われ、燃え猛る火の中に入られ、子どもを助け出され、呪文を唱えられますと不思議に火は消えてしまいました。この時、観音さまは右手を火傷されました。

村人たちは、それから人助けの観音さまと呼び、ますます信心を深くし、お参りする人が絶えない程でした。

川坂の村ではこの時から火事が起きなくなり、今まで続いています。

また、ある年のことです。観音堂に盗人が入り、御本尊が盗まれ、関西の方に持っていかれました。盗人は御本尊を売ろうとしますと「おれは川坂だ、おれは川坂だ」と観音さまがいいます。薄気味悪くなった盗人は、御本尊を置いて行ってしまいました。買おうとした人もまた次の人に売ろうとしますと「おれは川坂だ、おれは川坂だ」という声がするので、相手の人に押しつけるようにして手放しました。

こうして、人から人へと渡りながら、とうとう川坂に帰ってきたそうです。

この観音さまは、火事の時の負傷で今でも片手がありません。

川坂　観音堂

戸籍の窓

S61・9・15～10・14届出分

（敬称略）

おめでた

区名	氏名	保護者	続柄
木島	佐藤亮太	克幸	長男
相生町	志村和紀	正幸	長男
上町	山田　怜	司	二男
川坂	小笠原　愛	宏幸	二女
小池	土橋真実	孝典	長女
大楽窪	松村彩香	郁夫	長女
南町一	渡辺佳織	貢	二女
南町一	佐野明代	徹	長女
南町二	岡田　幸	晃敏	長女
南町二	小林千恵	英樹	二女
南町二	小林朋美	英樹	三女
大北町	和泉貴宏	元	長男
侭下町	朝比奈真美	薫	長女

かなしみ

区名	氏名	年齢
木島	芦川登志子	四五
相生町	芦川嘉吉	七四
上町	遠藤良夫	五〇
四十九町	阿久津喜吉	五五
宮町	山田春吉	九一
本通四	高橋勝治	八四
南町一	上野正雄	七〇
南町二	佐野きく子	七二
かぎあな	小林孝榮	七九
八幡町	吉田茂子	六〇
清水町	桐山秀隆	一六
侭下町	望月千代子	六〇

一里塚

10月12日、早朝よりにぎやかな声が山あいの広場にひびいていました。

北松野の秀村医院のところの交差点を由比方面に一キロほど上った右手の上谷に運動場ができ、この日はその竣工式でした。神事・来賓あいさつの後、インディアカ・ゲートボール大会などのレクリエーション、運動用具等購入の為のバザーが行なわれ、そのまわりでは、やきとり、やきソバ等の屋台が並び、盛会のうちに式は進行しました。

この広場は、北松野地区の子供、お年寄をはじめ、地域住民のスポーツ・いこいの場として町によって造成された広場ですが、いつまでもきれいに、モラルを守った使い方をしてほしいと思います。先日、野田山へ行ったときに東屋のまわりや木の根元等、ゴミが無造作に捨てられていました。ひとりが何の気なしに捨てたものが連鎖反応で次から次へとまわりに広がっていったのだと思います。こうした現象は、右へならえ的な日本人の道徳観念不足を如実にあらわしていると思います。私自身が今や習慣になってしまっているタバコのポイ捨ても、これを機会に直し、きれいな環境づくりを心がけたいと思います。

善意銀行へ寄託

（敬称略）

S・61・10・7～10・15

ベット三台、車イス二台

小笠原きみ（川坂）

二万円　佐野孝一（南町二）

おわび

先月号「戸籍の窓」欄で、小笠原源作さん七二歳を六三歳と掲載しました。深くおわびし訂正させていただきます。

お母さんの〝知恵袋〟

海背川腹（うみせかわはら）

この間さる方から釣ったばかりという鮎をいただきました。竹篭に笹の葉をたっぷり敷いて見るからに生きのいい代物が、頭を左に向け、腹を手前にして乗せてありました。何気ないことですが心得ているなと思い、釣りたての鮎の香りと共に贈り主の人柄のすがすがしさにも触れました。

もともと季節の贈り物は、神に供えた物を下げて人々が共に食するという「直会（なおらい）」から起ったものです。昔からその贈り方には随分気配りをしたものです。

海の魚は背を手前、川の魚は腹を手前に皿などに乗せる「海背川腹」といい、盛付の常識でした。勿論ご存知の方もいることと思います。そんなことどうでもいいとお思いの方もいるかも知れませんが、人に物を贈る時、一寸した気配りが物の値打ち以上に先方に喜んでいただけるのではないでしょうか。

あんなこと、こんなこと、祖父母から父母から伝えられている生活の知恵に思いめぐらす秋の夜長です。（婦人会）

俳句会

〈文協俳句会〉

宮町　増井　冬木

フト踏めば人形泣きぬ秋時雨
亡母の柄身に應う齢秋袷

南町二　法月　幸子

通草食ぶ蔓の在り処を聞きながら

大北町　天野　たま

旅立ちの神に朱塗りの太鼓橋

旭町　笠井みち子

廓という罠に戦くちちろの夜

旭町　秋山　光恵

鈴虫に耳を貸しをり寝入端

新町　小永井敦子

秋風の駅のホームの白スカート

新町　早川　和子

滝音もしっかり入れて山粧ふ

新町　漆畑　文江

虫干しや疊紙に残る亡父の名

南町一　錦織　和子

野天風呂女しずめて雁渡る

新町　山本まさ子

恙がなく主婦の座にをり茗荷和

宮町　望月　章子

白鶴鴿水の鏡を叩き翔つ

富士松野　市川美代子

十五夜のへそ餅そっと包みゆく

上町　大石　営子

ちちろ虫娘の小箱にのりゐたり